

第72回「社会を明るくする運動」 調布市意見発表会 意見発表文

学校名	調布市立第七中学校
代表者氏名	邊母木 桃子（へぼき ももこ）
学年	2年
題名	あいさつであたたかい社会を
本文	
<p>あいさつをすることをためらってしまった経験はありますか。正直なところ、私は何度もあります。あいさつは人と人との心をつなぐことができる大切なコミュニケーションツールです。メッセージアプリやSNSで行うようなコミュニケーションとは違った「直に話す」というあたたかさがあります。しかし、その大切さが人の中から日々失われていきつつあり、同じ年頃の中学生たちもあいさつが減っているように感じます。</p> <p>私は小学生の頃、あいさつにとっても積極的でした。人と会話するとき、たくさん言葉が思い浮かばなくてもあいさつはたった一言、二言で相手に気持ちを伝えることができ、なおかつした方、された方どちらもうれしい気持ちになります。あいさつをされずに無視されて不快になるという人はいたとしても、あいさつをされて不快になるという人はいないでしょう。このようなこと踏まえたうえで私は互いに笑顔になれ、あたたかい気持ちになれる、そして簡単に思いを伝えられるあいさつが大好きでした。しかし幼い頃の気</p>	

持ちがずっと続くわけではありません。私は徐々に「あいさつをする」ということに抵抗を感じるようになっていきました。理由として主だったものは二つあります。

一つめはあいさつをするに対する恥ずかしさです。「周りの友達が生きていないのに私がしていたら変かな。」「人と会う度に大きな声であいさつするのは恥ずかしいな。」と、幼い頃の純粋な気持ちに比べ恥ずかしいという気持ちが勝っていき、抵抗感が上がっていきました。恥ずかしさに負けていた方が恥ずかしい、あいさつができた方がかっこいい。と頭では思いうかべていても行動に変えることは難しいことです。二つめは受けとめてもらえなかった時への怖さです。あいさつというものは一人の力で成り立つものではありません。一方がしてももう一方が無視をすれば成立しませんし、それと同時に返されなかった方は悲しみ、もしくは怒りなどといったマイナスの感情をもつことになります。そのあいさつのスルーが意図したものであっても、そうでなく単に聞こえなかっただけであっても、一度でもこのような経験すると次からは「もしかしたら、また返してもらえないかもしれない」、といった恐怖感に襲われてしまいます。

このようなことがあいさつへの抵抗感の原因であると感じます。あいさつは大人から子供、年齢関係なくマナーとして行っていくべきものですが、子供から大人へと向かう成長段階とも言える中学生だからこそ、社会的なマナ

一を身につけていくためにもより必要だと考えます。しかし、だからといって全員が全員できるかどうかは別問題でやはり普段生活している中で全ての人々があいさつをしてはいません。もちろん、必ずしもあいさつをしなければいけないとは言いません。あいさつをすることで逆に傷つくようなことがあれば辛いことですしそれを強要するつもりはありません。それでも私はあいさつをすることで得られる喜びがあると思っています。お互いのあいさつがぴったりとかみ合えばそこはとても居心地のいい空間になると、気持ち良い生活が送れるという風に思うのです。それが大きな勇気が必要で少し恥ずかしさを感じるようなことでも、それを乗り越え相手から返してもらえれば直前までの悩みなんて忘れるくらいに嬉しい気持ちになるでしょう。

一つのコミュニケーションとして、マナーとしてあいさつは欠かすことのできない大切なものなのだと思います。そしてあいさつをすることで地域の結びつきを強めたり、犯罪などを行おうとする人のブレーキとなったりすることができます。つまり、あいさつというものは確実に未来の社会を明るく、より良いものにしていくためのツールであるということがわかります。これからの未来をになっていく私たち中学生はマナーなどに関係なくあいさつをしていき、社会を明るく変えていく第一歩として踏み出していくべきだろうと私は思います。

あいさつは気持ちを簡単に伝えることはできても、それをすること自体は

勇気がいりとても難しいことです。しかし、行った先にはお互いのあいさつで笑顔になっていける心地の良い社会が、あたたかい社会が待っています。今すぐにできなくてもいい。怖かったら小さな声からスタートでもいい。自分たちができる限りのあいさつをしてみませんか。きっとそれは明日からの明るい社会を築いていく第一歩となっていくはずです。